

京城日報

刊夕日一

米國駐墨軍の撤退

佛軍全線の攻勢準備

獨人の英國封鎖吹聴

獨暴行艦の變装模様

英艦隊の獨艦追跡

希臘對聯合國の敬禮儀

龍舉兵說流布

借款前渡金千萬圓

汪氏特使か

總督府相訪問

檢察正の異動

總督陸氏招待

市區改修追加

鮮銀増資

露國債券賣出

仁川支那人

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

大使安東通過

兩陛下御遊幸

陸氏奉天來著

御眞影傳達式

德壽宮午餐會

鮮銀増資計畫

露國債券賣出

仁川支那人

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

鮮銀増資計畫

露國債券賣出

仁川支那人

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

鮮銀増資計畫

露國債券賣出

仁川支那人

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

鮮銀増資計畫

露國債券賣出

仁川支那人

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

鮮銀増資計畫

露國債券賣出

仁川支那人

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

鮮銀増資計畫

露國債券賣出

仁川支那人

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

鮮銀増資計畫

露國債券賣出

仁川支那人

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

小宮氏出發期

芝罘結氷と貨客

● 年

仁川の書齋
上組は六上
宛持つて
■ 執主
學先生で
實の忌み
遠慮に便
は第二義
を選ばな
めて居る
穫時期や
の一年間
て來るし

々々廢つて行く朝鮮の書堂
 日謝二錢五厘、何して維持するか
 書堂では普通月俸が五十錢で、
 錢、中には毎日二錢五厘
 行つて放へを受ける。
 工は大抵、生徒兼備の道
 ある可き筈であるが、古聖
 無つた物質文明の空氣が、無
 入して来るので、道を、行ふ事
 になつて生活の爲めに手段
 といふ言ふ先生達が大半を占
 む。數年先生達は寒裸の收、
 草草や木屨の出版には、書主
 の食料被服日用品を持寄つ
 書堂同煙と言ふ

其の前に立たせて
 闇誦朗讀をさせ、海潮なく
 朗讀が出来た場合は授業を進行させ
 のと言ふ順序であるから書堂出身の
 者は普通學校出身者の世界的なるに
 反して傳統的である、理解的なるに
 反して記憶的である、自發的なるに反
 して機械的である、獨創力が無く困
 窮半端であるのは止むを得ない、で
 近頃では頑固不靈の老人連も

當時世に鑑み、普通學校教員
 育の必要を痛切に感じて來たらしく

ていつも抑うした先生を海御新海で居る者の子弟が三四名入塾してゐるものである(仁川より)

●東萊の朝火事 一月三十一日午六時頃東萊西門海雲宮(聯合馬車合所)より火出た。直に官署消防隊へ駆け付け、防火にめたる爲め全焼。一半燒三月にて鎮したるが場所柄とて非常の泥雜をきたりて(二葉山)

◇温かい羽根蒲團 輕くて暖かき爲に評判のよい羽根蒲團は、これまで多く舶來で密に密に割合に高かつたが、近來は和製でそれに劣らぬ物が出来るやうになりました。加ふるに値段も中

[illegible]

東京公債直取引
一日目
五厘
四厘
三厘
二厘
一厘

深川在米特電
一月在米
一六六六
一九九六
二〇〇六

東京期米特電
一月在米
一六六六
一九九六
二〇〇六

大阪期米特電
一月在米
一六六六
一九九六
二〇〇六

下週期米特電
一月在米
一六六六
一九九六
二〇〇六

米穀賣立
米穀賣立
米穀賣立
米穀賣立
米穀賣立

手続品は零一掃
手続品は零一掃
手続品は零一掃
手続品は零一掃
手続品は零一掃

田中全金
田中全金
田中全金
田中全金
田中全金

屠平缺乏之精肉
屠平缺乏之精肉
屠平缺乏之精肉
屠平缺乏之精肉
屠平缺乏之精肉

車隊入札米

車隊入札米は先月八百廿石口三十七に船積米未納米四百石

京城正米

本米は前二十四日の仁相上米

南大門の廻穀

安養一六〇
山田一四〇
西門一四〇

二川現物市場

二〇〇
三〇〇
四〇〇

市

新穀三三〇
舊穀三三〇
三三〇

新穀

上穀一〇〇
中穀一〇〇
下穀一〇〇

交けた

手交文
新成
新成

二川現物市場

二〇〇
三〇〇
四〇〇

二川現物市場

二〇〇
三〇〇
四〇〇

市

新穀三三〇
舊穀三三〇
三三〇

新穀

上穀一〇〇
中穀一〇〇
下穀一〇〇

交けた

手交文
新成
新成

二川現物市場

二〇〇
三〇〇
四〇〇

二川現物市場

二〇〇
三〇〇
四〇〇

[illegible]

明君道中記

第四十七席



家光公の仁憲によつて衣を裂いて怨は大阪に下りしと雖も、在外は轉輾する大勢あり。三國府に同様に付立たる者たかき。○三國府に同様に付立たる者たかき。○三國府に同様に付立たる者たかき。

用發 天候二十四大
 場零聞
 大阪の暴落
 手脈
 明君道中記
 第四十七席
 田邊南龍口演

[illegible]

明君道中記

第四十七席
田邊南龍口演

家光公の仁義によつて衣を裂いて想は大阪へ入城爲して關東勢を引受け戦を爲し其の虚に乗じて家康を討取れんと勇んで大阪へ立進まし、此時に名を改め車丹波守虎秀と名乗り入城いたし一方の大將となつて戰の度毎に大旗を立てましたなれば大阪方は薬より烏合の集り勢戦ひ利あらずして遂に元和八年五月七日落城しましたから、又々虎秀は大坂城を脱れて是より諸方を浪々して遂に江戸表へ入つて参りました。

山の中に先廻りをしたる彼の御水舟の遊に身を溺はせ、赤吉公より父三成が拜領した所他の短筒を以て家光公の御輿物に贈渡したものでございませう。此の事を申し上げました故家光公、附け召して一借ぎ流は車丹波で、今たか、忠孝堂武士大晴貴の道はず、今予が遺はした片簡を裂いて

入院
醫師大井門三郎
胃腸病院
院主 佐々木杏造

製一
産々
高年
百
萬
圓
を
超

粉 白 顔 美

と云ふことが最近貴婦人社交界の話題となつて居ます。

驚いた

某伯爵夫人談

「美顔白粉の管いゝ言ふ事は、傳に聞いては居ましたが實はまだ使つて事がありませんでした。處が先頭姿の最も崇拜してゐる方が美顔白粉の唄れてゐる點を立證されたので、従來使つてゐた舶來白粉を全部捨てて一振試してみましたが、ナルホド新しう上品な白粉で効果が御りました。追は學者が苦心の賜物又には、只生氣を、白い不自然な色につく白粉さば白さがちがつて、眞實な生れつき

適つた白粉

△△子爵夫人 陸

二體不自然な昔の白粉の缺點を
補ひ、搗て、無害無毒を標榜しよ
うと云ふので、最近色々な白粉も
發明されましたが、妾の見る處な
うも座禮式に適つた白粉と云ふ
ものは未だ一向に見當りませぬ

徳の由を

某教育家談

所謂セクショナルな現代の女子教育に苟もな
化の婦人々もを加味して始めて柔和で高潔な理
想の婦人が出来た。此は柔和の麗つてこれな
らぬで、今度美顔白粉に依つて始めてこれを實
現し得る事が出来た。由來白粉は白いもの
――白粉を塗れば顔の色が白くなる――ミ、この
問題は、美顔白粉を知つて居りますが、只白く
なるばかりでは人になつたミ言はれませんが、
や身軀の内自然色と調和の取れぬ不自然な色に
なるのでなく、生れき色の白い人ミ見わたるの
なくては目的は達せられませんが、舊式の白粉は

は嫣然一笑して

妾が日本へ来て第一に感じたのは、優にやさしき日本婦人のお化粧を、今少し進歩させたいといふ事でありましたが、其れには何よりも白粉を改善せねばならぬといふ事を深く感じました折柄、高貴の方々から國產奨勵の意味の下に完全な國產白粉を選定せよとの有難き仰せをも蒙りましたので、色々尋ねた中、甲斐あつて彼學者發見の美顏白粉をば未だ日本人さへ氣の附かぬ間に逸早く手に入れ、上高貴方に奉つたのを始め一般日本婦人に紹介しました結果、今日皆様のお化粧は全く夢のやうに進歩し、實に氣品の高い美しい御婦人を多く見受けるやうになり、妾が日本へ参つた使命も先づく圓滿にされたわけであります。

條件に於て居つて、お佐伯のやうに只まづ白
輪船の中から目ばかりリリ／＼させてゐる、よ
／＼考へれば滑稽な化粧が多かつたのです。
顔白粉は流石に學者が考へ出した新化粧料で、
何なる肌の人を試して、塗ればスナナリと色
白くなり、皺に注意を拂つて男ねばお化粧した
と思へられぬ程に追つた脂味のない色澤になり
ます。自然野郎にもならず、全く優にやさしく
し、雄氣あふれる美人と見えます。つゞき世に
よく言ふ美顏白粉を塗けた人こそ眞正の白粉の人と
は、目で直ぐ判る言ふものは此處で、私は大正の
婦人化粧一殊に硬着し教育を受けた人が家出
の母として、又社交界に立つた人、於ても是非美顏
白粉を施したたいと思ふのでした。
此御書案を讀して更に女流美顏術の泰斗マリ
ノウキを讀みました。

梅白

東京 館 天 順 谷 桃 大阪

三月
四月
五月
六月
七月
八月
九月
十月
十一月
十二月

本學年四月入學セシムルキ本學第一學
 年生徒約百五十名ヲ募集ス
 月二十日以後五日間ノ朝鮮官報及
 本校ニ就キテ承合スヘシ
 大正六年一月

五萬六千三百五十石

